"All life is an experiment. The more experiments you make the better." (Ralph Waldo Emerson)

人生に関する格言は数多くあれど、この格言はしっくりくる。「人生は全て実験だ。より多くを試みたものが、人生をよりよいものにできる」。おっしゃる通りである。自分の周りで、幸せな人を思い浮かべてほしい。どんな人だろうか。おそらく多くの人は、あらゆることに興味を持ち、友達が多く、自分で選んだ仕事に前向きに取り組め、（きっと）複数回にわたる交際経験がある、そんな人が思い浮かんだのではないだろうか。

そういう人たちと、そうでない人たち。何が違うのだろう。前述のエマーソンが正しいなら、答えは簡単だ。実験の、数。それだけである。どれだけ新しいことにチャレンジできたか。やろうと思ったことに、実際どれだけ取り組んできたか。

大学3年生にもなると、否応なく卒業後の進路を考えなければならない。就職活動というものが、目前に迫っているからである。だが、多くの学生にとって、進路を決めるのは簡単ではない。きっと自分は特別で、そんなに頑張らなくても物事は自分を中心に上手く進むべきだ、と自我に飲み込まれて生きている限り、自分がどういう人間かを知ることはできない。自分がどういう人間か知らずして、どうして自分の進路を決めることができよう？車のセールスマンが、目をそらしながらあなたに言う。「この車は……なんかいい感じです」。おそらく買う人はいないだろう。

……と、ここまで偉そうに書いてきたが、僕は、僕の周りの人が「あなたの周りの幸せな人を挙げてください」と言われたとき、まず名前があがらないであろう人間である。僕は昔から体力というものが乏しく、エネルギーを節約するために、物事を選定して取り組むきらいがる。やらない理由を見つけるのが非常に得意であり、何かの間違いで始めてもあきらめるのが早い。ということで、“実験”をあまりしてこなかった。

ということで、大学3年生のときに困った。大学時代、というか20年ちょいの人生において、打ち込んできたことなんて何もない。生きてきただけである。ただ、大学卒業の進路選択をミスると生きていけるかどうかも怪しい時代だ。そこで、どうにもなく“実験”をしなければいけなくなった。デザインは簡単で、進路において考えられる選択肢全てに挑戦するのである。幸い、日本の大学生の典型的な進路の選択肢は、①就職する、②院にいく、の2択しかないので、とりあえず企業のインターンシップに応募し、自分が就職し社会に出て生きていくに足りうる人材か見極めることにした。

結果は、「あははきっつー（白目）」。まずインターンの選考に通らない。大手はまず無理である。幸い、某外資のコンサルで１週間インターンできることになったが、僕の圧倒的コミュ力不足が炸裂し、良い評価は得られなかった。そこで就職活動を早々に諦め（今考えるともう少し違う業界を見ても良かった）、大学院に行くことにした。問題があった。お金である。

日本の大学院は学費が発生する。僕は理系で、私大に通っており、しかも家が貧しかったので、そのまま付属の院に進学するのはもとより考えてなかった。国立に行くのも考えたが、院からだと完全な学費免除はない。そこで、奨学金を取って海外院に行く選択肢を検討した。もしそれができれば、お金をもらいながら学位を取ることができる。海外経験もないし、英語も自分で勉強していたとはいうものの、コテコテの日本人である僕には難しい。何より、色々調べると海外院に行くために重要なのは学部の成績 (GPA）であり、大学１、２年に勉学に励んでいなかった僕には厳しい。研究実績も皆無である。まさにないないづくしで、ほぼ海外院の留学は現実的ではなかった。ただ、こういう研究をしたいというアイデアは漠然とだがあり、それを志望理由書に熱く書いた。内容は現実的ではなく、ほぼＳＦであったが、当時の社会状況を反映しており、人類のよりよい未来になくてはならないのは明らかなテーマだった。

驚くべきことに、“実験”のつもりで出願したドイツ学術交流会 (DAAD)の奨学金に通った。

毎年、理系枠は4人で、既にドイツでのポジションが決まっている博士課程の人が合格するのが習わしだ。実績もなく成績も普通、ドイツの院にまだ合格していない学部生が、本来取っていい枠ではない。僕の志望理由書をチェックし、あまりのレベルの低さに絶句した当時の僕の教授が、知らせを聞いてまた絶句していた。僕自身、何が良かったのか未だにわからない。面接に（おそらく唯一）スーツではなく私服で行ったのが良かったわけではなかろう。面接前にちょっと話した別の受験生のお姉さんと、受給者の顔合わせの時に会ったら開口一番、「……なんでいるの？」と言われたのが、最も適当な状況説明になっていると思う。

何が良かったのかはわからないが、とにかくドイツに行くことになった。ドイツ語力は０、英語も英検１級を持ってはいたし受け入れ基準もパスしてはいたが、speakingの経験値が圧倒的に足りない。がしかし、money talks. 奨学金を取っていれば、ドイツの院に合格をもらうことは簡単である。興味あるテーマに強そうな、チュービンゲンを選び、奨学金を持っていることと、おそらくコース開設以来初の日本人であることが相手側の興味を呼び、チュービンゲン大学の修士課程に進学することになった。進路が決まったのは、大学の卒業式当日、2013年3月末のことであった。